プロジェクト研究
「地域視座の平和学習及び平和実践に関する共同研究」報告

『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ』が示す生き方

―刊行記念シンポジウムを終えて―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　平田　雅己

平和を願い活動する地域の人々に喜ばれる本をつくりたい。学生時代と教員時代合わせてこれまで二〇年近くにわたって名古屋で過ごしてきた私にとって、『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ』はそんな個人的な地域への愛着と感謝の気持ちを表現した本である。「おくりびと」「まもりびと」「いたむひと」「きわめびと」・・昨今世間ではいろんな「ひと」が存在するようだ。そのような呼称法にならって本書における編者の私と菊地の役割を表現するならば「つなぎびと」といえそうだ。人と人をつなぐ。過去と現在をつなぐ。地域と世界をつなぐ。おおまかにいえばこの三点に留意し、もともとこの地域に存在していた人々の営為と出来事をできるだけ多くつないでいった。その結果として、立体的に浮かび上がってきたものは戦後七〇年かけてゆっくりと熟成されてきた草の根平和主義の実相だったといえよう。改めて本書の関係者全員にこの場を借りて感謝申し上げたい。本書を手にされた読者には是非平和を求める名古屋のピープルズパワーを感じてほしいし、それぞれの生活環境の中で行動するヒントを本書から学びとってほしいと願うしだいである。（本書の刊行意図や経緯に関する詳細については本書の「あとがき」を参照されたい。）

ところで物事への好奇心が旺盛な私は、プライベートでも「つなぎびと」的な越境生活を無意識のうちに実践してきたように思う。ごく身近なところに自分の知らない世界で活躍する魅力的な人々がたくさん存在している。そういう人々との出会いや語らいは自分の感性に磨きをかけてくれる貴重なものである。最近はＳＮＳなどを通じワンクリックで簡単に人とつながれる時代になった。だがそうしたつながりは本物といえるだろうか。承認欲求が強すぎるあまり、往々にしてつながっている相手はあなたと同じ世界にいる、あなたと同質の人間ばかりではなかろうか。先頃、ロック界の巨星デヴィッド・ボウイが急逝する訃報に接した。彼は絶えず自分と異質なもの、馴染みのないものに意識的に接近しそれらを貪欲に取り入れながらオリジナルな作品を創作し続けてきた。本書に収められた拙稿の中で「非戦系」市民活動と「共生系」市民活動を架橋する必要性を訴えた。この考えを個人の生き方に落とし込んでわかりやすく説明するならば、先述したボウイの生き方が模範といえるのかもしれない。もちろん彼のようにそうした生き方を徹底させるため絶えず人生をリセットし続けられるほどの勇気、才能、エネルギーは、残念ながら私には備わっていないが（苦笑）

話を本筋に戻そう。私の「つなぎびと」願望は幸か不幸か本書だけに留まらなかった。私にとってその続編ともいうべき企画が、二〇一五年一一月一日、名古屋市立大学滝子キャンパス二号館四〇四教室にて開催された本書刊行記念シンポジウム「ひろげようナゴヤから―みんなで考えるほんとうの平和」（主催・刊行記念シンポジウム実行委員会、後援・名市大人間文化研究所）である。宣伝周知期間が一ヶ月弱と短期間だったにもかかわらず、当日は本学教養科目「特色科目一六（平和論）」受講生四四名の他、著書関係者一六名、一般来場者六六名、あわせて一二六名の来場があった。実行委員会の有志学生や同僚教員のサポートのおかけで三時間半の長丁場を盛況のうちに終えることができた。

内容は二部構成。第一部は「ナゴヤ・ピース・ストーリーズとの対話」と題する書評会を実施した。

当初は本書の執筆陣が語る選択肢があったが、何分にも人数が多いなど様々な理由で調整が困難だったこと、さらには本書を教科書として展開中の平和論授業との内容重複を極力避ける必要性があったことなどを考慮し、思い切って外部から評者を複数招聘し、本書関係者にはオーディエンス席から適宜議論に参加して頂くやり方を採用した。様々なことを念頭に置いて人選を検討したが、最終的には私自身が会ってみたい、話をきいてみたいと思うフレッシュな方々に依頼し快諾を得ることができた（公私混同ご容赦）。本稿の後に置いたコメント要旨にあるように四名とも本書を高く評価してくださり、「風の人と土の人」（西川さん）、「想像力の大切さ」（深井さん）、「寛容と共感」（徐さん）、「爆撃は格差の象徴」（西形さん）など異なる角度から本書の存在価値を読み解く含蓄のあるキーワードを示してくださった。その後の質疑応答では、若者団体シールズの評価、平和行動の多様性、戦争の伝え方、他者理解と歴史認識、政治教育のあり方、政治参加に消極的な中年世代の取り込み方など広範なテーマについて有意義な情報・意見交換が行われた。議論全体を通じて、自分と異なる他者を受け入れることができる主観的な「共感力」と、物事を客観的批判的に捉える「分析力」というベクトルが異なる二つの能力の双方をバランスよく培っていくことの重要性を再認識させられた。

シンポジウム第一部の様子

第二部はワークショップ「ナゴヤからピースを創るために―もしも私が名古屋市長選挙に出馬したら」を実施した。公職選挙法改正に伴い、今年夏の参議院選挙から選挙権年齢が一八歳以上に引き下げられる。国政選挙における投票率の低下が問題視されて久しい。投票率向上のために必要とされる主権者教育の方法論は様々にあるだろう。今回、思い切って選挙権ではなく被選挙権を行使する立場に自分の身を置くことで選挙への主体的な関わり方を考えてもらう機会を設定することにした。またこの企画には本書が意図した地域の「まちづくり」の一環として平和を考える視座を養う意味合いも込められていた。事前のシミュレーションでこの公約作りが意外と難しいことが判明。大いに不安を抱えながらの強行実施だったが、蓋を開けてみると我々の予想をいい意味で裏切る、老若男女、定住外国人をも含む実に多様な十名の立候補者が名乗りをあげた。「毎週水曜を祝日にし、会社や学校施設を市民活動のために開放する」（平の人党の山本さん）「市内の小中高の校外学習をピースあいちで行うことを義務付ける」（ピースあいち党の宮原さん）「地域に住む高齢外国人を支援する介護通訳研修制度の設置」（希望党の葛さん）「いじめ防止対策として小中学校で大学型の選択式授業を導入する」（日本ビール党の小西さん）「アニメ漫画文化を通じた平和なまちづくりの推進」（芸術工学部党の長澤さん）etc.. 披露された平和公約はいずれも身近な日常に引きつけた興味深いものばかり。内容もさることながらマイクを持って演説する一人一人の凛とした佇まいがとても美しく見えた。投票の結果、ピースあいち党の宮原大輔さん（現同館事務局長）が当選した。

シンポジウム第二部の様子

つれづれに記していたら紙幅が尽きたので最後に一言。

ほんとうの平和は国（政府）がつくるのではなく民衆がつくるもの。

本書とシンポジウムを通じてつながった数多の人々の生き方から私が再確認した本質である。

追記・今後「風の人」から「土の人」になって、つなぎ人生を継続する新たな個人的目標が生まれ

た。

【第一部パネリストのコメント要旨】

●西川由紀子（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授／紛争研究・平和学）

「平和」を題材にした著書は少なくないが、本書は単なる「平和」に関する本ではなく、「名古屋（愛知・中部圏）の風土から読み解く平和」について書かれた本であり、「平和というテーマから読み解いた名古屋の風土」について書かれた本である。ここでいう風土とは、気候や地勢という意味合いだけではなく、人間の文化の形成などに影響を及ぼす精神的な環境という意味も含んでいる。「平和」をテーマに取り上げて何かを議論すると、必然的に個々人の経験や思想、何にふれたのかといったいわゆる主観が現れるものである。本書に関わった著者にとって、その主観の出発点であったり、拠りどころとなったりしているのが、名古屋（愛知）という風土であるという点が、この本の最大の特徴であり、魅力であり、他に類をみないところといえよう。

本書の編者が最初に提起しているように、本書で取り上げられている「平和」とは、広義の意味であり、戦争などの直接的な暴力に関連するテーマだけではなく、偏見や差別など社会に内在する構造的歪みによって生じる問題に係るテーマも含んでいる。実際、本書の執筆者が取り上げたテーマは多様である。とはいえ全ての著者に共通しているのは、自らが取り上げるテーマに関連する直接および構造的暴力に対する怒りや憤りに近い思いに動かされているという点であろう。

現在の日本の社会では、「構造的暴力」や「積極的平和」が広く認識されているとはいえない。むしろ平和は、戦争などの直接的暴力の対語として捉えられることが多いことから、広義の平和の意味や構造的暴力の問題を、本書の最初に提起していれば、平和についてそれほど考える機会がなかった人や、中高生にも読みやすい書となったのではないかと感じた。しかし、この点については、読み手が探っていく点でもあるので、本書の価値を大きく損なうものではない。

編者が本書の「あとがき」で、本書を通して当初は全く意識していなかった「まちおこし」「まちづくり」の意味合いを見いだしたと述べている。一般に行われる（例えば農業や食を通した）「まちおこし」では、地元で生まれ育ち地元の特有のものを作り、継承している「土の人」と、他の地からきて新しい発想をもたらすことや、その地の特徴を捉えて引き出す「風の人」が交わることによって、それぞれの風土が映えて「町おこし」「村づくり」を実現するといわれている。『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ』も、「土の人」と「風の人」である本書の著者が、それぞれのテーマを通して平和について語ることによって名古屋（愛知）の風土を示し、それぞれのテーマから平和を読み解いた点は見事であり、おそらく「風の人」であろう編者がそれぞれ点在するテーマをつなぐ作業を通して「まちおこし」「むらづくり」を体現しているところは称賛に値する。

本書が名古屋に拠点を置く出版社から出されたという点も重要であり、本物の「平和と名古屋、名古屋と平和」の書として後々に残しておきたい一冊である。本書の編者・著者には是非、本書で完結するのではなく、これからまだまだ発掘されていくだろう名古屋の風土について、平和を切り口に読み解き、平和について、名古屋という風土を切り口に読み解いていってほしい。

●深井聖子（ＮＰＯ法人東海外国人生活サポートセンター事務局長）

まず、一番衝撃を受けたのは、なかとしおさんの「平和を演じる―平演会の三十年」の文章。

平演会のきっかけとなった戯曲『勲章の川』の中で、高校の社会科教師の庄司先生が語った「花岡で何があったか。…戦争があった。日本人と中国人の間で。」という一言は衝撃的。

以前仕事で出会った方のことを思い出した。訪れた福井県敦賀市にある「人道の港　敦賀ムゼウム」では、杉原千畝さんの偉業を紹介しているが、そこでボランティガイドさんが中国人のお客さんに発した最初の一言。「私は戦争を体験していないけれども、私たち日本があなたの国に対してしてきたことを心からお詫びします。」という言葉を聞いた時の衝撃と『勲章の川』の庄司先生の言葉は同じくらいの衝撃。日本人として犯してしまったことを知り、認めること、そして相手を思いやることの大切さ。それができれば、自然と「ごめんなさい」と心から

言えるのではないかと感じた。
　同時に、戦争の怖さについて、誰もが加害者になりうる可能性があることについても、終章の平田先生が紹介されたミルグラムの実験の行を読んで、恐ろしくなった。いつ自分も加害者になるかもしれないと。
　そんな恐怖に陥った時、なかさんの文章の結びにある庄司先生の言葉は、私を励ましてくれているように感じて、もう一度読み直した。「人間はまっとうでもあるし、狂ってもいる。…戦争を知らないが、戦争を心から憎み、拒否する君たちを信じる。…新しい時代はそのためにある。その時代は君たちのものだ。」
　神直子さんのコラムの最初の一文「日本人なんか見たくなかったのに、何であんた達はフィリピンにきたんだい！」も衝撃的だった。
　日中関係が悪化した際、ニュースでは中国で反日デモや暴動があったと報道されるが、私自身は一度も中国で罵られたり、嫌な思いをしたことがないので、直接的に言われるということがどれほどの衝撃なのかと想像し、自分が神さんの立場だったら、その時どうしたのか？と考えてしまった。おそらく、誤ることもできず、何も言えずに早くこの場を立ち去りたい、としか考えなかったのではないかと、思ってしまう。
　神さんの言葉通り、「国際社会では「学校では教わらなかった」、「自分とは無関係」という考えでは通用しないのだと改めて思った。結びの「戦争のない未来を切り拓くためには、まず過去と向き合い、そこから真摯に学ぶこと。そして、未来の舵取りを誤らないためには、「想像力」を豊かにすることだ。」という言葉を拝読し、自分自身も想像力を働かせて、外国にルーツを持つ人などのサポートを非力ながらしていけるよう努力を続けたい。

●徐東輝（京都大学法科大学院生／学生組織 ivote 関西代表）

　本書は、多数の筆者が参加する合作でありながら、核心である「平和の再考」がブレないよう大変構成が練られているとともに、平和という壮大なテーマを「ナゴヤ」という切り口から語ることで関心と行動を掻き立ててくれる、本当に素晴らしい著作です。
　本書は大きく三つの区分ができます。まず始めに、第一部として「戦争とは何か」をファクトベースで語り、更に戦後の動きを説明することで日本が置かれている現在地を確認します。そして第二部として、その現在地から「平和」ということの意味を改めて再考するための論考が、沖縄や慰安婦問題、あるいは原発事故やリーマン・ショックなどの観点からあげられています。最後に第三部として、「草の根からの平和」として、実際に私たちがどのような形で「平和」を実現していくことができるのかを種々の視点から提案してくれています。
　若者世代から政治へ声を届けたいという思いで活動・発信を続ける私としては、やはり第三部が印象的でした。いま「平和」や「平和運動」というと、反戦運動や政治活動のように受け取られてしまう風潮ができあがってしまい、それだけでなぜかネガティブな印象が生まれてしまいます。しかし、本書が提案するのは、様々な形での平和への問いかけであり、身近な平和への気付きです。
　本書を通じて私が改めて確認した平和へのキーワードは、「寛容と共感」です。戦争と平和とは必ずしも対義語ではないものの、平和を維持することが国を豊かにするということであり、平和を維持するために個人ができることは、他者への寛容と共感から始まるのだということ。本書では、異論を排除せず、読者が思考するためのたくさんの材料が散りばめられています。本書を読み進めながら、ぜひとも自分の確信を保留してみてください。新しい価値観を受容することが自己の深化のみならず、自己の属する社会の平和へとつながることが確認できました。
　「ナゴヤ」に縁もゆかりもない私がこの本に希望を見出したのは、「地域」という切り口です。ぜひこのシリーズが私の生まれた「オオサカ」や私の住む「キョウト」という場所からも生まれてほしい。そうすることで、その地域に住む方々が身体性と熱量をもって「平和」を再考することができると思います。
　ぜひひとりでも多くの方に本書が届くように祈っています。

●西形久司（東海高校社会科教諭／名古屋空襲研究）

「爆弾は上から下へと落ちていく―空爆が前提とする「格差」について―」
　米軍B29部隊による日本本土空襲の犯罪性を解明することは、この先の非戦につなげていくために必要ではあるとしても、それだ

けでは、円環は閉じられない。空爆の歴史は、被害の視点だけで語られてはならない。

『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ』――「ナゴヤ」と「ピース」という二つのキーワードがクロスする地点には、さまざまな切り口から現代の問題群に挑む、これほどにも多様な人たちが集まってくる。空襲史研究のミッシング・リングも、このあたりを探せば見つかるかもしれない。この書のインパクトは私をそのような思いに駆り立てた。なぜ爆弾は上から下へと落ちていくのか。空間的な上下だけではない。社会的な「格差」をも貫いて爆弾は降ってくるのである。

人類最初の空爆は、ライト兄弟が初めて空を飛んでから八年後の一九一一年のことであった。第一次世界大戦は空という広大な未知の領域を戦場に加えた。第一次大戦後も、勢いづいた英国軍機は大英帝国領内のあちこちに容赦ない爆弾の雨を降らせた。相手が uncivilized tribes であれば、空軍兵士の精神的苦痛も軽減され、そのうえ視覚的に相手を自分と同じ人間として認識できない距離があるおかげで、兵士は自分の行為の結果を目の当たりにせずに済んでいた。経済的な格差は軍事テクノロジーの格差に容易に結びつき、テクノロジーの産物は植民地において最大の効果を発揮した。英国空軍参謀長トレンチャードは、早くも一九一九年に「従来の地上部隊によるよりもはるかに安上がり」であると、空爆の経済効果に言及している。植民地や占領地に対する空爆は、不可逆性の保証付きであった。つまり爆弾を受ける側は、それと同じ手段で落とす側の本拠地を攻撃することができなかった。日本軍の場合も例外ではない。一九三一年の錦州爆撃に始まり、重慶の爆撃に至るまでの全過程で不可逆性の護衛がついている限り彼らに躊躇はなかった。一九三七年八月に始まる南京渡洋爆撃の際に、「爆弾は目標に命中しなくてもよい。爆撃の目的は敵国民に恐怖心を惹起せしむることにあるのだから」と、指揮官が訓示していた。誰でもいいから手当たり次第無抵抗の人々を威嚇し、恐怖に陥れ、死へと追い詰める。現代の私たちはこのような思想をテロリズムと呼ぶ。

戦争のなかで、加害と被害は重層的である。本土空襲に先立って南京や重慶に対する空爆があった。さらに被害の位相も単純ではない。一九四五年三月二五日の名古屋に対する米軍の空襲は、米軍にとって「実験」であったという。また最近の研究は防空法や防空体制が住民の被害を拡大したことを解き明かしている。敵国の爆撃部隊からも、自国の政府からも、この国の人々は見棄てられていたのである。

圧倒的な「格差」を前提として、放たれた爆弾はいつの時代も上から下へと向かう。二一世紀の今日でも、イラクやアフガンでの空爆にみられるように、基本的にこの枠組みは変わっていない。これらの旧植民地の人々には、米国やEUのいくつかの国に対して爆弾のお返しをするだけの力がなかった。それどころか傷ついた人々に治療を施す設備も体制も不十分な相手に対して、非情な爆弾はなおも容赦なく降り注いでいる。マスメディアは、往々にして不都合な部分をトリミングしておいて、知らぬ顔を決め込む。空爆の歴史は、戦争のメカニズムに潜むウソくさの所在を、私たちに教えてくれている。

会場の様子

【本書執筆者（名市大教養科目「平和論」担当者）の感想】

菊地夏野（副編者）

『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ』に「慰安婦」問題について載せることができたのは大変意義深い。出版記念シンポジウムでパネリストの徐東輝さんもおっしゃっていたが、単に平和問題といっても「慰安婦」問題はなかなか含めてもらえないことが多々ある。残念である。だが私見によれば「慰安婦」問題は日本の今後を考える上で大変重要である。なぜなら、この問題は戦前日本の性差別のみならず民族差別、階級差別、ナショナリズムの全てを体現しているからである。そしてもちろんこれらの問題は戦前に終わらず現在の日

本社会が抱えているものでもある。改憲がささやかれ、街頭ではヘイトスピーチが流れ、人々は生活と労働に追われている。昨年末の日韓合意も被害者に喜んでもらえる誠実な内容ではなく、既に反発されている。日本政府が本当にこの問題に向き合えるように、わたしたち市民は取り組みを続けていかなくてはならないだろう。本書が、そのための絆、他の様々な平和に関わる問題とのつながりを深める機会となることを願っている。

阪井芳貴（本書第七章担当）

二年以上の準備期間を費やし、大変な編集作業にあたられた平田さんと菊地さんに、またすべての執筆者に「平和論」担当者としてお礼を申し上げます。また、平田さんの音頭取りで刊行記念シンポジウムが多くの参加者を得て意義深い学びと体験の場となったことにも、重ねてお礼申し上げます。

私は、かかるイベントを体験するのは初めてでしたが、外部の研究者や実践者による書評（というよりそれを超えたコメント）をいただけたのは、執筆者の一人として貴重な機会でした。この本全体を捉えて、ここから得られるものや課題をそれぞれのコメンテーターから示されたこと、またそれを執筆者のみではなく多くの読者（となる参加者）と共有できたことも大変意義あることだったと感じています。また後半の学生たちによる模擬名古屋市長選も大いに盛り上がり、かつ結果的に「ピースあいち」の宣伝にもなり、ありがたいことでした。こうしたゲーム感覚で現実社会のさまざまな課題にチームで話し合いながら解決策を練っていくというのは、「平和論」の授業でも取り入れると良いかもしれません。収穫の多いシンポジウムでした。

山本明代（本書第三章担当）

シンポジウムに参加して、あらためて気づいたことは、過去に起こった第二次世界大戦やヴェトナム戦争、イラク戦争などの戦争と、平穏な日常を脅かす構造的暴力とがつながっているということである。私が執筆を担当した朝鮮人強制連行や朝鮮女子勤労挺身隊の問題は、山本かおりさんが担当された朝鮮学校への就学支援金不支給問題や、在特会によるヘイトスピーチなど、現在起こっている差別や暴力の問題と深くかかわっている。コメンテーターの方々から、活動の中で直面する困難な点は無関心な人に問題を伝えることだと伺った。これは私も教師として日々実感している課題である。参加者の方からは、何か行動することで経験する、そこで得た怒りや喜びが次の活動へとつながっていくというお話を伺った。実際に動いて人の話を聞いたり、体験したりすることによって、これまで気づかなかった日常の問題や世界で起こっていること、過去の出来事と自分自身との関連性を知ることにつながる。行動するモチベーションを育む授業や研究を目標としていきたい。

名古屋の平和運動史 本に

名市大の平田、菊地准教授が刊行

日中関係改善に貢献した「ピンポン外交」や、市民が立ち上げた平和資料館「ピースあいち」など、名古屋市民らの平和運動の歴史を紹介する「ナゴヤ・ピース・ストーリーズ　ほんとうの平和を地域から」（風媒社、税抜き千八百円）が出版された。まとめたのは、名古屋市立大人文社会学部の平田雅己准教授(四)と菊地夏野准教授(四)。「非戦や差別、貧困の解消を求める市民の歩みを伝えたい」と、当事者ら二十一人の証言や報告を収録している。（安藤孝憲）

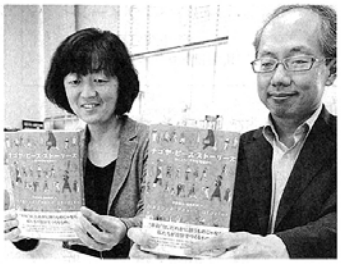
大学で隔年開講の教養科目「平和論」を教える二人が、幅広い世代に読んでほしいと二年前に企画。名古屋地裁・高裁でイラク派兵違憲訴訟を闘った弁護士や、名古屋であった卓球世界大会を舞台とする外交劇「ピンポン外交」を取材したテレビ局ディレクターなどが原稿を寄せた。

「名古屋空襲と模擬原爆バンブキン」の項では、太平洋戦争末期、米軍が春日井市などへ五十発の模擬原爆を落としたことを突き止めた市民の調査活動を紹介。平田准教授は「名古屋は繰り返し戦争と平和に関する歴史の大舞台になった。それを多くの市民が知らないと感じた」と、刊行を思い立った経緯を明かす。

差別や偏見、貧困をなくそうとする市民のまなざしも広義の平和運動と捉え、外国人労働者や性的少数者をとりまく問題も取り上げた。菊地准教授は「さまざまな場面で社会を良くしたいと願う人がいる。そのことに、お互いが気付けるきっかけにもなれば」と願う。

四六判、三百五十ページ。巻末には取り上げたテーマにそれぞれ取り組んでいる各団体の連絡先を掲載した。

十一月一日午後二時から、名市大滝子キャンパス（名古屋市瑞穂区）で執筆陣らを招いた記念シンポジウムを開く。入場無料。問平田雅己准教授の研究室＝052（872）5831



「ナゴヤ・ピース・ストーリーズ」を手に取る平田准教授(右)と菊地准教授＝名古屋市瑞穂区の市立大で

中日新聞朝刊 2015年10月30日付